

交通権学会ニューズレター『トランスポート21』第21号
(2005年4月15日・発行)掲載記事

地元住民から見た東武鉄道「伊勢崎線第37号踏切」の現状と問題点

半沢一宣

3月15日に東武伊勢崎線竹ノ塚駅構内「第37号踏切」で、踏切死亡事故が発生した。本稿では日常生活でこの踏切を通行する地元民の視点で、この踏切を取り巻く状況と問題点を指摘し、再発防止策を提言したい。

この踏切を横切る道路は、地元では「赤山街道」と呼ばれる古い道で、同駅周辺の東西を結ぶ地域幹線道路である。しかし、東京メトロ日比谷線竹ノ塚検車区の存在と、周辺の地権者の利害関係が複雑化する問題などが、立体化による踏切除去を阻み続けている。

この踏切を、朝ラッシュ時には上り急行線を3分10秒毎、同緩行線を2分～2分30秒毎に列車が通過する。また、下り列車の合間を縫って検車区との出入庫列車の入換も行われる。このため、この踏切を無人(自動)化してしまうと、ラッシュ時には踏切がまったく開かなくなってしまう可能性がある。

そこで、上り緩行線列車の駅停車時間の余裕や検車区入庫列車の入換間合を利用して、臨機応変に遮断機のロックを解除するボタンを操作し踏切を開ける扱いが、筆者が踏切番舎の横で観察していた限りでも日常的に行われている。そうしないと赤山街道の交通が確保できないからである。実際、この踏切で上り緩行線列車が入庫列車の停車中に遮断機が開いて踏切を渡れたという経験は、たいていの地元民が持っているはずである。この踏切が有人(手動)として存置されているのにはこのような要因もあることを、見落としてはならない。

このような状況で踏切保安業務に従事する係員の精神的重圧は、おそらく部外者の想像を絶する、経験した者でなければわからないものであるに違いあるまい。

しかし、人間とは完ぺきではない、誰でもいつかは必ず間違える生き物である。番舎内の表示盤に現示されているのが実際には急行線列車なのに緩行線列車だと勘違いしたり、まだ表示盤に現示されていない下り列車の接近前に一度開けてしまおうと気が焦って上り緩行線列車の発車直後に上り急行線列車の接近を失念して遮断機を開けてしまう(今回の事故は正にこのケースだった可能性が高い)ことなどが、他の踏切保安係では絶対ないと言える保証は、どこにもない。

問題なのは、踏切保安係がこの種のミスをしてしまったときにそれをバックアップして安全を担保する装置を、東武鉄道が整備していなかったことではないだろうか。つまり、踏切から一定の距離(非常ブレーキによる停止距離を定めた国土交通省令の規程に準じるとすれば600m程度)以内に列車が接近しているときには踏切遮断機の解除ボタンが働かないようにする装置

踏切から一定の距離(と同様に考え600m程度)まで列車が接近した時点で踏切の遮断機が開いていた場合にはATSと連動して列車を非常停止させる装置が設置されていれば、今回の事故は未然に防止できていた可能性が高い(ただし今回事故が発生した踏切の場合、上に記した事情から上り緩行線列車と検車区出入庫列車は、これらの対象から除外するべきかもしれない)。

裏返せば、東武鉄道の上層部は、過去に何回か発生していた、今回の事故の前兆と言うべき「事故にならなかった事故」を検証していたはずの時点で、なぜこのような装置を導

入していなかったのかという疑問が生じる。上層部に「人間とは必ず間違えることがあるもの」という認識が欠けていて、その前提に立ってこのような保安装置を整備すべき必要性を軽視していた過失はなかったのだろうか。それとも同社の上層部は「事故にならなかった事故」の検証を元々何もしていなかったか揉み消したのか、はたまた企業としての利潤追求優先のため踏切保安対策費を出し惜しみしていたのであろうか。

既に逮捕されている踏切保安係一人だけにすべての責任を負わせて今回の事故を幕引きにするとしたら、真の再発防止は図れまい。人的ミスバックアップする保安装置がなければ、別の踏切保安係のミスによっていつか同様の事故が繰り返されてしまうのを、未然に防ぐことができないからである。それでは今回の事故の犠牲者は犬死にであり、また本当の意味での遺族の救済も不可能であろう。

東武鉄道に限らず、手動踏切を抱えるすべての鉄道事業者は、「人間とは必ずいつかは間違えるもの」という前提に立って、踏切保安装置を整備する必要がある。それを怠って将来同じ事故が繰り返された日には、「鉄道は利益優先のため安全を犠牲にしている」として国民からの信用をますます損ね、社会的非難と嘲笑の末に、地球環境問題などを背景とした鉄道の復権も画餅に帰すであろう。

(本稿は、HPに掲載中の書き下ろし解説を大幅に要約したものです。より詳しい解説と関係する図表などは、<http://www.geocities.jp/mgmlkos/hnzw/index.htm>でご覧になるか、または切手400円分同封で「〒 - 東京都足立区 半沢一宣」までご請求ください。)

(2005.3.26.記)